

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	淡路こども園		
○保護者評価実施期間	2026年1月13日		～ 2026年2月13日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	25	(回答者数) 17
○従業者評価実施期間	2026年1月13日		～ 2026年2月13日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数) 9
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 6日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	「本人主体の支援」と「家族支援」を両輪として支援を行っている。家族支援においては保護者に寄り添い、きょうだいも含めた家庭全体を視野に入れて支えることに大きな意義がある。	子どもの発達状況に応じた支援と、家庭の状況に応じた相談・援助を行うため、保護者と日頃から積極的にコミュニケーションを図り、要望や不満も含めて話しやすい関係づくりを心がけている。	複合的な課題を抱える家庭が増えている現状を踏まえ、こども園だけで解決を図るのではなく、法人内施設をはじめ関係機関と連携し、必要な相談・支援へ適切につなげていく。
2	保護者会や卒園児の親の会があり、行事や勉強会、講演会を合同で実施している。幼児期にとどまらず将来を見通した支え合い・学び合いの機会となっている。	親子通園の際には、先輩保護者に来園してもらい、話を聞く機会を設けている。また、情報提供を受けたり、懇親会を実施したりするなど、保護者同士が交流できる場を設けている。	保護者同士が顔の見える関係を築けるよう、実施の頻度を増やすとともに、内容についても保護者主体で話し合いながら決定できるようにしていきたい。
3	親子通園を実施している。子どもの様子を保護者と職員が共に確認しながら支援を行うことで、子どもの理解や対応について保護者の理解を深め、手ごたえを実感してもらうことにつながっている。	保護者の状況や家族の事情により、親子通園の実施が難しい場合がある。その際は、それぞれの状況に配慮しながら、必要な援助を行うなど柔軟に対応している。	保護者に精神疾患や障がいがある場合や、単身で働かなければならない場合など、親子通園の参加が難しいケースがある。そのため、従来の枠組みにとらわれず、曜日や時間など家庭の状況に応じて柔軟に対応していく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	環境・体制の整備に関しては、建物の老朽化やエレベーターの未設置など、バリアフリーが部分的。また、規定の職員数以上は配置されているものの、子どもの状況によってはマンツーマン対応が十分に行える体制とは言い難い。	施設の老朽化に伴う設備の故障や不具合については都度修理や買い替えを行っているが、快適さには課題がある。また、職員の人数だけでなく、フォロー体制や連携の面でも改善の余地がある。	毎日の清掃や整理整頓に加え、定期的な安全チェックを実施している。あわせて、将来を見据えた全面的な設備改修工事を行う。 日頃から職員間で密にコミュニケーションを取り、研修等を通じて職員一人ひとりの資質向上を図ることで、フォロー体制や連携面で臨機応変に対応できる体制を整えていく。
2	コロナ禍以降、「ふれあいまつり」を地域開放せずに実施しており、保育園や幼稚園との交流だけでなく、地域の子どもや住民との関わりの機会も失われている。今後は、地域とのつながりを意識した活動の再開が求められる。	コロナ禍をきっかけとして、その後、中心となる職員数の減少により、「ふれあいまつり」の地域未開放が続いている。	保護者や子どものニーズや意思を確認した上で、地域の公園や行事に参加する機会を増やす。 「ふれあいまつり」は、地域開放に向けた体制整備に努める。
3	活動プログラムが固定化されがち。園庭の遊具が老朽化により撤去となり、現在、遊べる遊具が少ない。	プログラムの内容や展開の仕方等、子どもの発達状況に合わせて、工夫や臨機応変な対応が十分になされていない。 建物の全面的な老朽化が顕著。	職員の資質向上に向けて、活動プログラムの前後に打ち合わせや振り返りを徹底し、課題や目標を明確にしたうえで取り組む。 老朽化により遊具が減少しているため、安全面に十分配慮しながら園庭環境の見直しを行う。遊具に頼りすぎない遊びを基本としつつ、子どもの発達状況に応じた固定遊具の新設も検討、安心して多様な遊びができる環境の充実を図る。